慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	上野國佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳(後藤守一著, 帝室博物館發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.3 (1933. 8) ,p.187(567)- 188(568)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330800-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

上野國佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳

（後藤守一著　帝室博物館發行）

本書は昭和四年十二月發掘調査された茶臼山古墳についての報告書であつて、前編調査として第一發掘の經過、第二古墳の位置及發掘以前の狀勢、第三古墳の外形、第四墳丘の內部、第五出土遺物（一）、第六同上（二）、後編考察として、第一墳丘の外形、第二埴輪家、第三埴輪腰掛、第四埴輪蓋と埴輪翳、第五結語、及び附錄埴輪家聚成として、第一埴輪家聚成表、第二埴輪家資料略解の部門に分れてゐる。これらの記事によつて知られる本古墳の最も著しい特色は、墳丘の內部において船形の木炭槨を有してゐたことゝ、出土遺物の中において埴輪家を多數得たことであるらしい。而して前者については、從來發見せられた粘土槨が多く船形をなしてゐても、その形は何れも獨木舟をみるごとく舳艫ともに船舷と一直線をなしてゐるのが普通であるのに、本木炭槨が船首船尾を高くあげてゴンドラ式の形をなしてゐるのは、上古時代の船を考へる上に興味深い資料であると言つてゐる。上代人が船形のものに遺骸を藏めて埋葬した習慣及びその意義については別の機會に詳說するとて、本書でのべられなかつたのは遺憾である。

埴輪家は堅魚木をあげた切妻家一個、綱代で棟を飾る切妻家二個、切妻の倉庫三個、四注の倉庫一個、及び納屋一個、合せて八個で、如何にも地方豪族の一屋敷を表はしてゐるがごとき感を與へるものであるといふ。而して本書においては埴輪家についての綜合的考察を試み、從來の研究の概要、埴輪家出土遺蹟の性質及びその出土狀態、型式の分類、埴輪家の相對的年代—型式の推移、埴輪家の年代、その分布、その意義、上代建築史の資料としての埴輪家について論じられたが、その中埴輪家の意義を解して、これは死者の來世の家として墓上に建てられたものであるが、時代の降るにつれその意義が漸次沒却せられ、單に墓の上に建てるものとなつて形式化し、これに家としての最上の形を與へるとともに、家の概念から遠ざかつたものをつくるに至つたのであるとなしてゐる。たゞ吾々の疑問とするところは埴輪家の置かるゝ位置の問題であつて、副葬品のごときは古墳內に埋葬せらるゝのに、死者の來世の家とせらるゝ埴輪家が墳上に置かるゝのは如何なる理由であらうか。副葬品は身につけるものであるから、遺骸の傍近く置かるゝのであらうが、これらの點について教示を得たいと思ふ。

而して本古墳から埴輪家のみならず、其他埴輪腰掛、埴輪蓋、埴輪翳のごとき形像埴輪が出土し、從來棄てゝ顧みなかつたこれらの細片を集め、二年餘の歲月を費して接合復原を試み、これによつて形像埴輪の意義について新なる考察をなされたのは大いに注意すべきである。卽ち著者によると形像埴輪はすべて宗教的意義を有するものゝやうで、すべて葬儀行列の用、又は死者の世界

のためのものであり、後世の御遷宮と類似が多く、從つて埴輪をもつて墳墓の表飾となす見解はとるべからざるものであるとゝもに、これを支那の石人、石馬に原由をもとむべきでなく、むしろ明器に多くの類似を有するが、他方において日本特有の色彩を發揮してゐるとなし、またこれが死者に表献するものとしてつくられたゝめに形式化が著しく、埴輪家が必ずしも當時の家の忠實なる模寫であるといふことができないから、同樣に埴輪人物像の表現にのみ依據して當時の服飾を論ずることの危險であることを警告された。要するに本書は築造年代西紀五六世紀に比定せらるべき、すでに衰頽期に入つた一前方後圓墳の發掘報告書であるが、その埴輪に對する見解は今後の埴輪研究に多くの云唆を與ふるものであつて、最近における考古學界の意義深き成果と言はねばならぬ。（松本芳夫）

歴史哲學序論（石川三四郎著　曉書院發行）

本書は、序文にも冒頭してゐる如く、歴史學の序論、若しくは總論とも稱されるべきものであつて、いはゞ著者の史觀、若しくは歴史研究方法や態度に對する抱負を披歴せるものと申したい。

今本書論述の目次の順に應じて、これを大觀しながらその内容を紹介すると、第一編歴史學總論に於ては、人間的科學（または人道的科學）の提唱者たるエドワード、カーペンターや、クロポトキン、若しくは、獨逸の人格的、個人的科學を主張したるマックス・シュテイルナーや、又佛蘭西の地理學者にして過激論者たるエリゼ・ルクリュや、若しくは同じく佛蘭西の批判哲學者にして、一種の人格主義を主張したるシャルル・ルヌーヴイエや、若しくは獨逸の歴史家エドワード・マイヤーや、若しくは佛蘭西の實證主義者オーギュスト・コント等の史觀と諸説を引例して、著者のいはゆる獨立の學的藝術たる史學（吾々に於て、歴史はそれ自體が一種の藝術である。科學の方式を以て成立する藝術である。故に歴史は巧利的な他の手段たる意義を全然除いても、それ自身に於て、大きな價値と目的とを持つた獨立の學的藝術である（緒論五頁）に對する著者の學的態度を決定してゐる。著者がこゝに引用したるこれらの學究者は、申すまでもなくいづれも人類進化の綜合的解説者にして、狹い經驗と、淺い知識を以て、複雜なる人間社會の現象を、簡單なる自然律や、論理の矛盾や、道德律を以て、一方的に解説したのでなかつた。著者の史觀や、學的態度には、かゝる先人の著書の感化が、甚大であると信ずる。殊にカーペンターの人間觀や、エリゼ・ルクリュや、シャルル・ルヌーヴイエが、本書を通じて、熾烈に反映してゐるやうに思はれる。そしてクロポトキンや、マックス、シュテイルナーや、エリゼ・ルクリュは、何れも、虚無思想家であつた如くに、著者の思想には、明かに虚無的な、コスモポリタニズムの思想が、到る處に反映してゐる。

例へば緒論に於て、「歴史は無常である」といひ、「空の空なるかな、すべて空なり」といひ、「國の東洋と西洋とを問はず、人種の黑白紅黄の別を問はず、いづれの歴史のいづれのページの何れの文字にも諸行無常、有爲轉變の哀音を、響かせぬものはないで